

# 世界選手権 2005

小泉 成行

世界選手権日本大会（WOC05）が終わりました。2003年に強化選手として指定されて以降、多くの支援を受け、本大会に選手として参加しました。ここのその報告を行います。

報告書は3部構成になっています。第1部ではWOC2005を目指し始めた2002年以降の取り組みの概要について触れています。第2部ではWOC2005期間中の出来事を日記調に記録しました。

- 第1部 WOC2005までの取り組み
- 第2部 WOC2005ダイアリー
- 第3部 WOC2005外部報告書
- 付録 WOC2005日本チーム成績について（強化部）

## 第1部 WOC2005までの取り組み

### 1 - 1 . 2002年夏 WOC2005を目指したきっかけ

2000年に開催が決まったとき、WOC2005に自分が出場するというイメージは沸かなかった。そもそも世界選手権を見たことがなかったし、国際大会にも出たことがなかったの、想像できるはずもなかった。しかし富士でのワールドカップで海外トップ選手の走り（というよりは姿だけ）を見て、世界の舞台へ漠然とした憧れを持っていた。

そういった憧れと、大学の先輩の影響もあり、ユニバーシアードを目標にし、2002年夏にブルガリアの大会に出場した。このとき、まだ世界の頂点には立っていなかったティエリー・ジョルジュ（フランス）やエミル・ウイングステッド（スウェーデン）と競い、圧倒的な差をつけられ、世界の壁の高さを実感した。詳しい報告は、私のウェブサイト（<http://homepage2.nifty.com/controls/>）にて公開している。

しかし、開催国ブルガリアのキリル選手がショートで入賞した。観客はとても少なかった。しかし彼は必死でゴールへ駆け込み、少ないながらも観客は彼を大声援で応援し、称えた。既にインカレを経験していた私は、大きな応援を受けたことはあったが、会場中が一人の選手を応援するという光景を見たことはなかった。日本の世界選手権では、インカレ会場のすべての応援が自分に向けられる、そんな中を走ってみたい。そのとき、明確に選手として出場したいという意味と、日本でやれば入賞できるかもという希望が生まれた。

### 1 - 2 . 2002年秋～冬 強化選手指定を受けるまで

ブルガリアでのユニバー後、とにかく世界選手権を経験しなくてはと思い、翌年のWOC2003スイス大会を目指す計画を立てた。そのためにはまず強化選手に指定されなくて

はいけない。当時は日本ランキングで上位になると強化選手に指定されたので、少しずつ順位を上げていけるように準備した。それには体力的にも技術的にもボロが多かった。これまではその両面を同時に鍛えてきたが、海外の選手が冬はオリエンテーリングをしないでクロスカントリースキーなどの他のスポーツに取り組んでいると聞いたことに影響され、どちらかに重点を置いて取り組むことにしてみた。

まず、抜本的な体作りのために11月末のマラソンに挑戦し、それに向けて9月から11月までの3ヶ月計画で体作りを始めた。目標はサブスリーとし、ランニング雑誌を見ながらスピードトレーニングのメニューを組み、継続的かつ段階的に筋力トレーニングを取り入れた。また初めて、オリエンテーリングをしないでトレーニングだけに集中するなど、メリハリのあるトレーニングプランを立てた。マラソンは3時間24分で目標は達成できなかったが、12月以降の大会でオリエンテーリングの順位は上がり、2003年の年頭に強化選手に指定された。爆発的に体力が伸びたという感覚はなかったが、マラソンを経験したことで60分くらいのレースであれば余裕で耐えられるという自信に繋がった。

### 1 - 3 . 2003年 2004年、2005年を意識した取り組み

2003年はまず世界選手権出場を目標にした。2005年で初めての世界選手権となると余計なプレッシャーを感じてしまうので、それまでに世界選手権を経験しておくことが必要であった。

トレーニングは、オリエンテーリング回数を増やして、技術的な強化を行った。とくにNT合宿に参加できるようになり、ランニングクリニックや高いレベルでのトレーニングに刺激を受け、あまり工夫をすることもなくレベルを上げることが出来た時期であった。

3月までの予備選考会は通過して、4月の本選考会に出場したが、力及ばず代表選手には選ばれなかった。しかし、代表選手との差はほんのちょっとでしかなく、少しのミスをなくせるようになれば勝機はあると感じた。

選手には選ばれなかったが、世界選手権を経験しておきたかった。また翌年にユニバーシアードと世界選手権を絡めて北欧でトレーニングをする目的で長期遠征を計画していたので、もっと海外経験を積んでおきたかった。そのことから7月のオーリンゲン、8月の世界選手権併設大会参加のために1ヶ月の遠征をした。北欧の中でもオーリンゲンを選んだのは翌年の世界選手権スウェーデン大会を睨んでのことであった。

オーリンゲンではまったくレースが組み立てられなかった。しかし同期の加藤らと一緒にであったので、競い合うという身近な目標があり、モチベーションは維持できた。スイスに移動してからは、代表選手の直前合宿の手伝いなどをしながら過ごした。宿泊施設が不十分で、また歴史的な酷暑でタフな生活であったが、そんな生活を通して、海外で不自由な生活することに耐性が出来たように思う。

初めて見る世界選手権は地元スイスのシモーネの大活躍もあって、とてもきらびやかな世界に見えた。派手な演出、大型スクリーンで中継される選手、TV・新聞などのメディア

の取り上げ方などに圧倒された。日本でもこんな大会ができるのかと、要らぬ心配をしつつ、この舞台で走られればどんなに燃えるだろうかとワクワクした。とくに市街地を舞台にしたスプリントに大変興味を持った。もともと短距離のスピードには自信があったので、これなら勝てるかもという気持ちと、塩田選手の好タイムが可能性を見せてくれた。

帰国後は、遠征でトップ選手に比べスピードが足りないことから、スピードアップを計るとともに、スプリントを見据えて、合宿などのメニューの中で一部区間のみトップスピードを出した中でナビゲーションをするなどのトレーニングを行った。今考えると、このトレーニングはその後の NT チームのトレーニング方針と一致していくことから、慣れの部分で優位に立つ要因になったと言えるだろう。

この年はパツとした成績は残せなかったが、エリートでも常に 10 位以内に位置することができ、10 位以内に入るのがやっとだった前年に比べ地力が上がっていることが実感できた。

#### 1 - 4 . 2004 年冬～夏 長期遠征

2004 年は、全日本大会 3 位以内とユニバーシアド、WOC2004 出場と本大会で結果を残すことを目標とした。

まず 3 月の全日本大会は、直前に体調を崩したこともあり不満の残る内容であった。とくに 1 , 2 月の調整がうまくいっただけに悔しさが大きかった。しかし、4 月頭のユニバー選考会では好タイムで走れたことで、それまでの成果へ自信が持てた。

ところが世界選手権選考会直前に今度は足首をひどくひねってしまい、WOC 選考レースは不発に終わってしまった。なんとか補欠として選ばれた。とにかくチーム内の WOC の取り組みだけでも知っておこうと、遠征を予定通り、ユニバーから WOC04 までの 3 ヶ月間に設定し、間にデンマークでのワールドカップ（ヨーロッパ選手権）にも参加することで国際大会での経験を積み、WOC05 までの最後の 1 年で取り組むべき課題を明確にすることにした。

トレーニング面では、5 月に来日した NT コーチのイーキスが伝えたトレーニング方法などを積極的に取り入れた。単純な量ではなく、目的意識をもってトレーニングをすることを聞かされたので、常にトレーニングの目的を考えて取り組むことにした。それにより、ただ走るだけのトレーニング時間は減った。

遠征中の詳しい報告はウェブサイトの報告書を参照していただきたい。WOC2004 では補欠であったが、何とか出場機会を得ようとアピールもして、スプリントに出場できた。結果は予選落ちであったが、ミスがなければ体力的には予選を通過できるという自信に繋がった。と同時に、最初に夢見た WOC2005 での入賞は（NT 全体でも）難しいとも感じた。

#### 1 - 5 . 2004 年秋～2005 年冬 WOC05 年への本格的準備

帰国して一息つく暇もなく、WOC2005 の公式トレーニングキャンプが始まり、海外選手

が多く来日した。「日本なら・・・」という希望は半分残り、半分消えた。トップ選手はどこでも速い。(少なくとも私自身は)個人戦での入賞は難しいだろう。でもそういう選手でも不慣れな土地ではたまにミスをする。事前に来日していない中堅選手はすぐには対応できないかもしれない。そういう取りこぼしが多くなる中で、我々はしっかりまとめればリレーならばなんとかなるかもしれないと感じた。同等に個人戦も決勝での上位は難しくても、予選通過はできるはずという自信は残ったし、「予選通過はしなくてはいけない」「それをするためにここまで頑張ってきた」という気持ちになった。しかし、後から振り返れば、この感覚が逆に余裕をなくしてしまったように思う。

秋以降はイーキスが個人コーチとして付いてくれたこともあり、トレーニングプランに自信を持って取り組むことが出来た。試行錯誤を繰り返し、それでも効果に対して半信半疑だったこれまでの状態に比べると自信をもって取り組むことが出来た。

明けて2005年、いよいよWOCイヤーになったという頃に、ターゲットをミドル・スプリント・リレーに絞った。これは、スピードが順調に上がってきたこと、持久力に少し不安があり、かつ4月から就職し、トレーニング時間の確保に自信がなかったことなどが理由に上げられる。

NT合宿ではリレーを見据えて、スピードを出して競い合うことが重視されるようになった。個人で合宿を行うことも増え、オリエンテーリング回数が格段に増えた。

3月の全日本大会はロング種目ではあったが、トレーニング量も増やしていたので、ある程度持久力にも自信が持てたことから、3位以内を目指して臨んだ。結果は2位で、その自信は増し、来日していた選手との比較からスピードにも自信が持てるようになった。

## 1 - 6 . 2005年4～7月 WOC05への最終準備

予備選考に位置づけられた4月のミドル・スプリントレースでもまずまずの結果を残せ、あとはどれだけ愛知の山を知り尽くせるかにかかってくると感じた。また、続々と来日してくる海外選手をうまく使って自信を持つことが重要になると考えた。

しかし4月から就職したこともあり、最初の2ヶ月は生活のリズム作りに費やそうと考えた。5月の連休の合宿では体がだるく、疲れを感じたが、体力的には目指しているレベルに達していると感じられたこともあり、焦りは少なかった。

ところがちょうど2ヶ月たった5月末に会社の都合で失業するなど、公私でバタバタと不運が重なった。一時はオリエンテーリングを続けることさえも悩んだが、ここでオリエンテーリングを止めてしまったら一生後悔すると、半ば狂ったようにWOC05へ情熱を傾けた。6月は毎週末愛知へ向かい、徹底的に愛知の山を知り尽くす努力をした。特にルートチョイスは場面場面において、即座に判断できるように取り組んだ。

7月の最終選考会を迎えるに当たって、ロング以外の3種目すべてに通過できる自信があった。スプリントは3位であった。しかし、ミドルでは途中までいいレースをしながら、リタイアすることになった。翌日のリレーでも最後でミスをしてしまった。反省すべき点

としては、精神的に自分を追い込みすぎた点にある。「ここで負けた、これまでの努力が水の泡」という感覚が常にあった。結果としてプレッシャーをかけ過ぎたことになる。結果的にスプリントの代表に選ばれた。

## 第2部 WOC2005 ダイアリー

### 2-1. 直前トレーニングキャンプ

世界選手権 1 週間前に最後の合宿を行った。メニューとしては出場するスプリントと可能性の残ったリレーのメニューだけであった。

かなり無理を言って、新しいスプリントマップを用意してもらい、3 ヒート同時スタート練習などを行った。未知のトレインで、スピードを出すと少しミスが目立つことがあったが、スピードには自信を得られた。少しだけ、ほんの少しだけスピードを落とし読図に時間を費やせば予選通過には完璧なレースができるという自信をもった。そのイメージを頭の中で何度も繰り返した。スプリント開催地でもある藤岡を見学し、イメージをより高めた。

リレートレーニングではフィジカル的には問題なかったが、ナビゲーションに雑な部分が出来てしまった。しかし今から慌てても仕方ない、自信を持つことだけを考えて、不安な要素には目をつぶって、とにかく強気でいた。ここで弱音を吐いたら負けだと思った。

合宿後、これまでのレースをすべて振り返り、本番に向けた課題を設定した。まず注意すべきことを列挙した。普段出来ている当たり前のこと（アタックポイントの設定・現地での確認、アタック3原則の確認など）から、不安要素（ミスしてしまったときの積極的思考、ルートチョイスで迷ったときの判断基準など）まで考えうるすべてを挙げ、それをまとめて以下の3点をレースのメイン課題にした。

- ・コントロールからの脱出時、道から森への脱出時、アタック時のコンパス確認  
（少しでも無駄のない距離を走るため）
- ・プランをしてから動く
- ・プランの基本は道走り+森

レース中はこの3点だけを考える。今の状況ではなく今の手続きに集中する。

### 2-2. WOC 期間中

**8月5日(金)** スプリントレース5日前に現地に入った。夕方着でとくに何もしない。水分を多く取るように心がけた。

**6日(土)** 午前中亀山城のモデルマップへ入る。入り慣れた山だったので緊張感が薄く、逆にミスしがちになった。どうしても記憶で進んでしまうためコンパスチェックが散漫になりがち。夕方は散歩だけ。

7日(日) ミドル予選の観戦。スタートの様子を見学に行く。男子トップスタートの鹿島田さんが「友達が作ったマップに最初に入れるなんて幸せだ」という言葉が素敵だと思った。予選を4人通過した。コーチ陣の喜び方が、これまでの歴史の長さを感じさせた。紺野さんのゴール後の控えめなガッツポーズが、しかしとても力強く感じた。

私はパブリックレースに参加した。体力的にはあまり追い込まなかったが、コースの見にくさでミスした以外はほとんどノーミスで、上述の課題に集中した走りが出来た。

8日(月) ロング予選観戦。男子は通過者なしで残念な気持ちになった。昼寝をしていたら背中に少し痛みを感じた。マッサージをしてもらい、夕方軽くジョグしたときには違和感がなかった。

9日(火) 藤岡の昭和の森でスプリントのモデルイベント。Cハッチは通れない、Bヤブは走れる、地形は見通しにくいことなどをチェック。ルートチョイスとアタック時のコンパスチェックを再度確認した。

10日(水) スプリント本番。結果は25秒差での予選落ち。ゴール直後には、もう少し何とかできたと思うけどこんなものかなと変に冷静な自分が嫌だった。時間が経つに連れ、予選通過のための力は十分あったのにという悔しさがにじみ出てきた。やはりもっともっとスピードが欲しいという欲が生まれた。ミスをしてもしにしない、とにかく前へ前へ進む力とその余裕があれば、それだけでAファイナルは当たり前になると思った。両親が見に来てくれたのがとてもありがたかった。

リレーもかなり不利な状況だったので、ここからはお祭りを楽しむモード。決勝も開会式も万博会場もとにかく楽しかった。それだけレース前は張り詰めていたという裏返しなのかもしれない。

11日(木) ミドル決勝観戦とBレース出走。決勝を見ていて思ったのは、速い奴はどこでも速い、強い奴はどこでも強いということ。Bレースはあまり走りこめなかったが、これが日本の大会なら5~7位くらいだと思った。結局今の実力はそんなものでしかない。それに満足していた気がする。日本代表ではなく日本のエースと呼ばれる存在になりたい。

12日(金) ロングBレース。専門外だったロングだが、Bレースと言うことで距離に不安はなかった。愛知の森ならロングでもうまく走れる。それだけ愛知の山を、愛知の走りを知り尽くしてきたのだ。

13日(土) クラブカップリレーやその他イベントごと。夜には下山の夏祭り。お立ち台で盆踊り。お祭一色の一日だった。

14日(日) リレー。インカレのリレーのような気持ちでひたすら応援だった。大助さんがビジュアルでニコラスと一緒に現れたのには感激した。最終結果は少し残念だった。もう少しいけたかなと思うからだ。次は絶対に走りたい。これまでのままだと何も得られない、何かを変えていかなくてはいけないと感じた。バンケットはお祭り。

### 第3部 WOC2005 外部報告書

はじめに、日本チームに多くのご声援をいただきありがとうございました。どの選手もが、応援に力を受け、最後まで力強く走ることができました。

私はスプリント種目に出場しました。結果は予選不通過でした。予選通過、決勝上位進出という目標を達成できず悔しく思います。

レース中は、突っ走ってしまいそうなところで自分をコントロールし、いいレースができていて、でもいつもより体が硬くて走れていないという感覚を持ちながら走っていました。1分前の有力選手に追いつき、全体的に荒れる展開になっていると思い、ミスをしないうでゴールすれば予選は大丈夫という気持ちで、最後まで諦めることなく、落ち着いて走ることができました。ゴール直後に時計を見て、さすがに時間がかかりすぎたとがっかりもしましたが、ベストは尽くせたと感じることができました。

しかし、少し時間が経って、改めてレースを振り返ってみると、雑にナビゲーションをしてしまいタイムロスをしていたところがたくさんあることがわかりました。また、体も硬く、過度の緊張状態にあったのではないかと考えています。そのことから、現在の課題である体力面だけではなく、技術面、精神面においても、まだまだ改善すべき点がたくさんあるように感じます。逆に言えば、まだまだ伸びしろがあるということでもあります。もっと早く走れる選手になれるようこれからも日々努力してまいります。

最後に、このような大きな舞台を用意していただいた、大会運営者、ボランティアの皆様には厚く御礼申し上げます。また、コーチ、スタッフ、ボランティアとして今回の大会に向けた選手強化にご協力いただいた多くの皆様にも感謝いたします。これからも日本のオリエンテーリングを盛り上げていきましょう！！

### 第4部 WOC2005 日本チームの成績について（強化部）

次ページ以降は強化部の加賀屋コーチ（当時）によって行われた WOC2005 年の成績分析です。参考までに添付します。

# WOC2005 日本チームの成績について（分析）

強化委員 加賀屋 博文

## 1 これまでの WOC との比較

過去の WOC と比較して日本開催による変化はあったのか、それを踏まえて日本選手のパフォーマンスをトップタイム比で評価する。対象はロング予選、ミドル予選、リレー。予選の方式は変化しているが、ほぼ現在に近い形式になった 1995 年以降を対象とする。

### （1）総括

#### ①海外選手のパフォーマンス

個人種目の予選通過ラインとリレーの入賞ラインは、日本開催においても過去と顕著な差はなかった。高温多湿、参加国の減少という要因はあったものの、レベルとしてはこれまでの世界選手権と同等であったといえる。（この前提に立って日本選手の評価を行う。）

#### ②日本選手のパフォーマンス

個人種目では、男子ミドルの紺野と女子ロングの元木が過去を通じて最も高いパフォーマンスを発揮した。ただしそれ以外の選手は過去と比べても特に高いパフォーマンスを発揮したとはいえなかった。各種目よい選手と悪い選手の差が少なかった。これは誰も大きなミスをしなかったという技術的な要因が大きい。

リレーではトップ比は男女とも過去最高。特に女子はこれまでとの成績比較が意味を成さないほどの突出した結果を残している。

各種目の分析については以下のとおり。

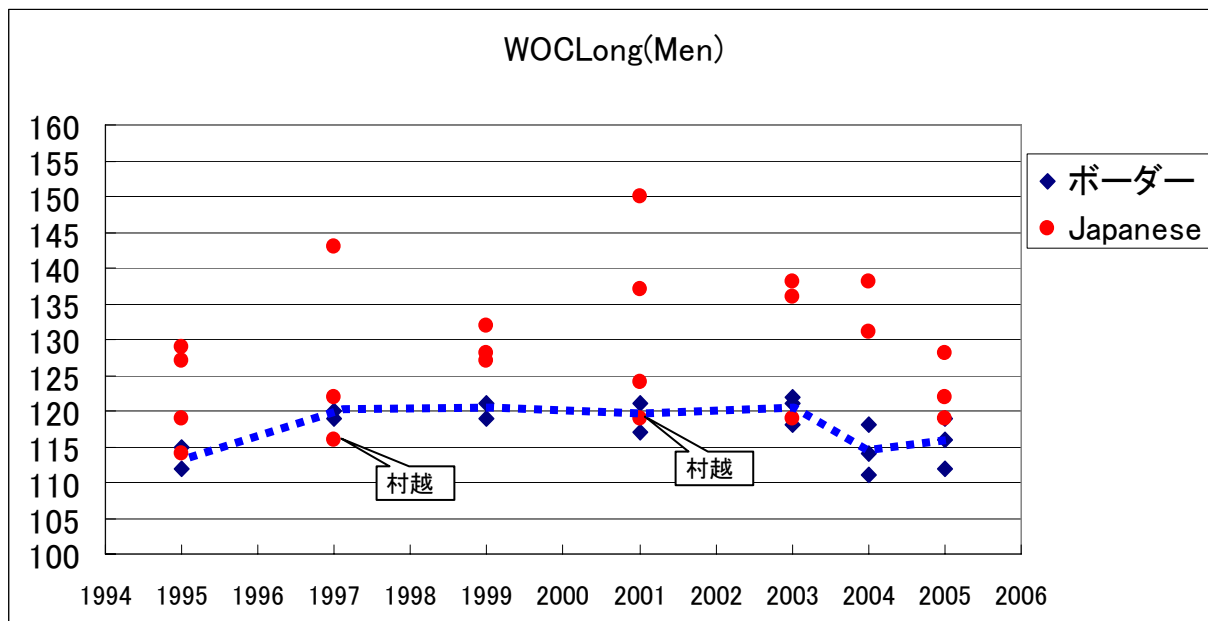


## (2) ロング予選

### ①男子

これまでの予選通過のボーダーラインはテレインに関わらず 115-120%。今回も平均で 116%と特に日本開催による変化はなかった。ここ 2 回ばかりはやや厳しくなっている。今後も通過には最低 115%が必要となってくると思われる。

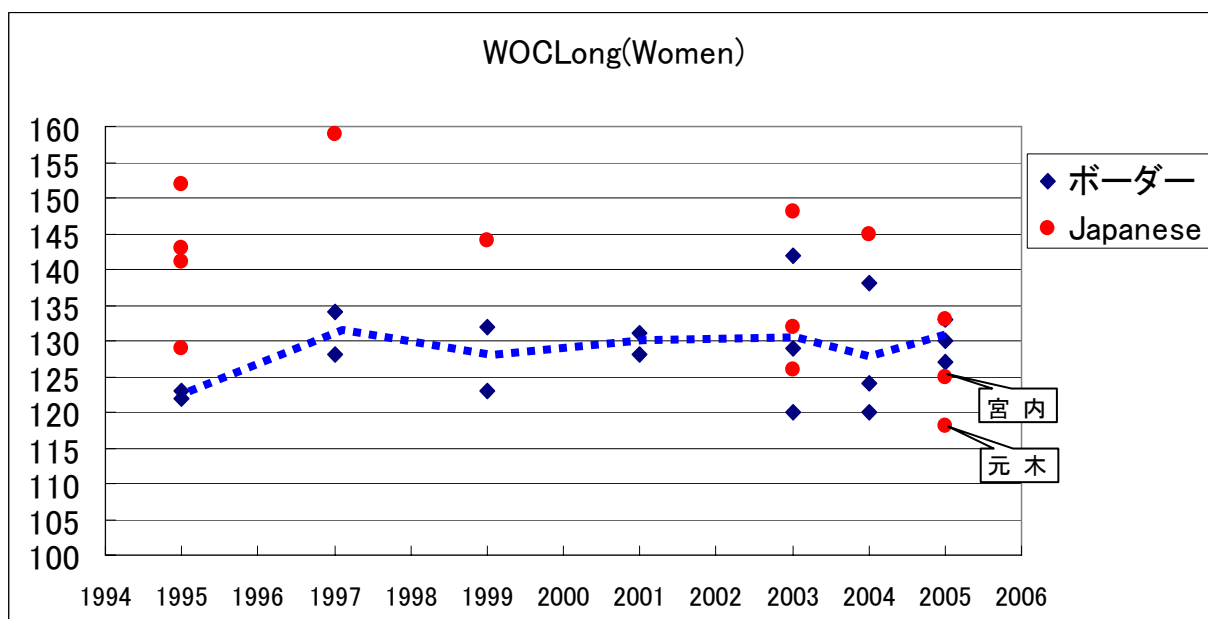
日本選手の通過者が唯一ゼロであった種目だが、パフォーマンスを見ても、3 人とも大きく遅れてはいないが、地元だからといって過去と比べても突出した結果ではなかったことがわかる。



### ②女子

予選通過ラインは平均ほぼ 130%。今回も同様だったが、過去 2 回に比べてヒートによるばらつきはほとんどなかった。

通過した元木と宮内は過去最高のパフォーマンスであり、特に元木は過去のどんな大会、どんなヒートでも通過できたほど高いパフォーマンスを発揮している。

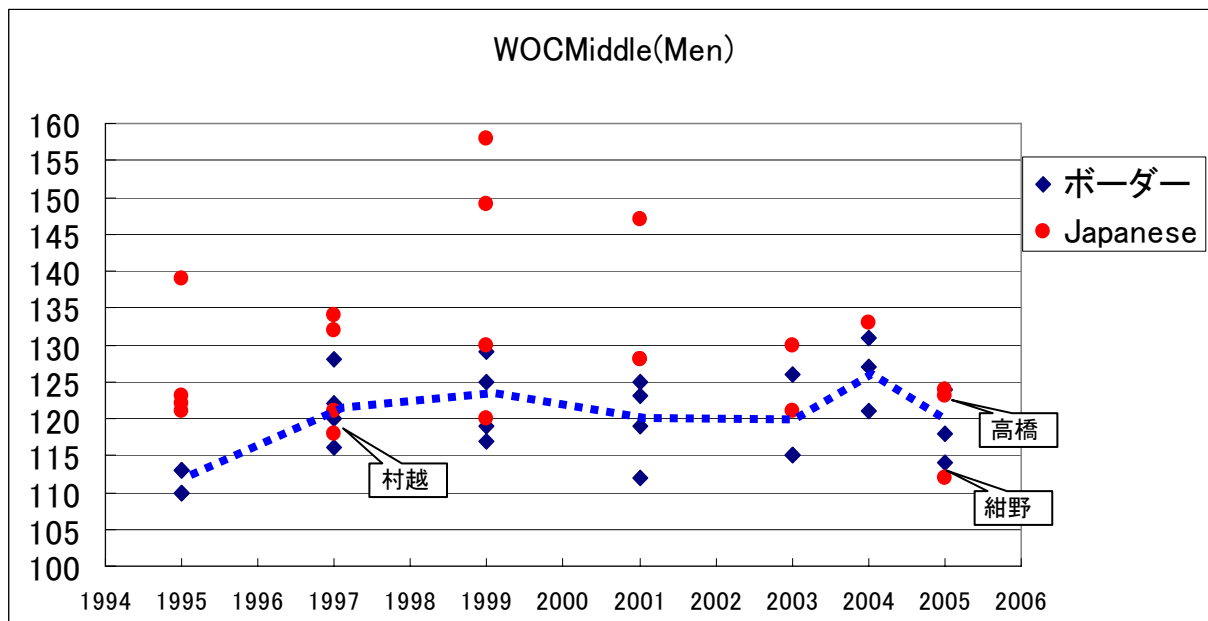


### (3) ミドル予選

#### ①男子

トップまでつばりあいだった 1995 年を除き、通過ラインは 120-125%。昨年は 130%を越えていたが、今年は難易度が低かったと思われるため 5%下がった。ロングよりはヒートによるばらつきが大きい。

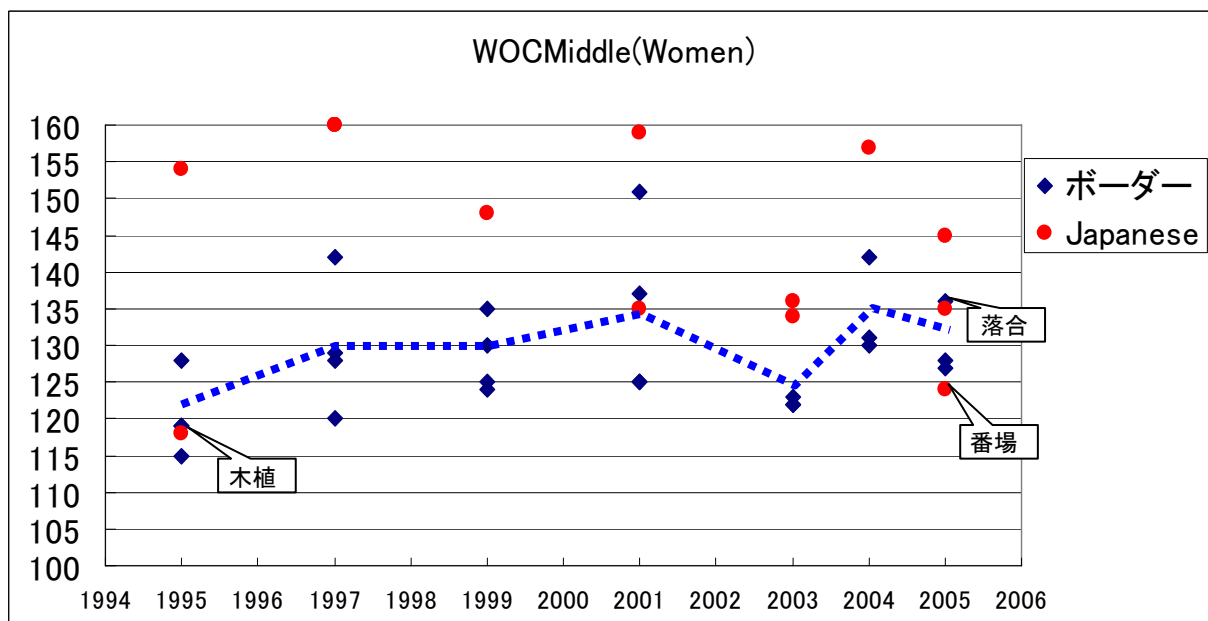
紺野のパフォーマンスはこれまで唯一通過していた 97 年の村越をしのぎ過去最高。過去何度も秒差で落ち続けた種目であるが、今回は初めてボーダーで通過を果たした。



#### ②女子

通過ラインは 125-135%。ヒートによるばらつきが大きい、最近では縮小傾向。今回もシモーネを除けばほぼ各ヒートそろそろ。やはり昨年よりは通過ラインは下がっている。

95 年の木植が最高だが、ボーダーとの比較で言えば今回の番場もほぼ同等のパフォーマンス。過去 150%以内にも数人しか入っていない最も通過が遠かった種目で 2 人の通過を果たした。

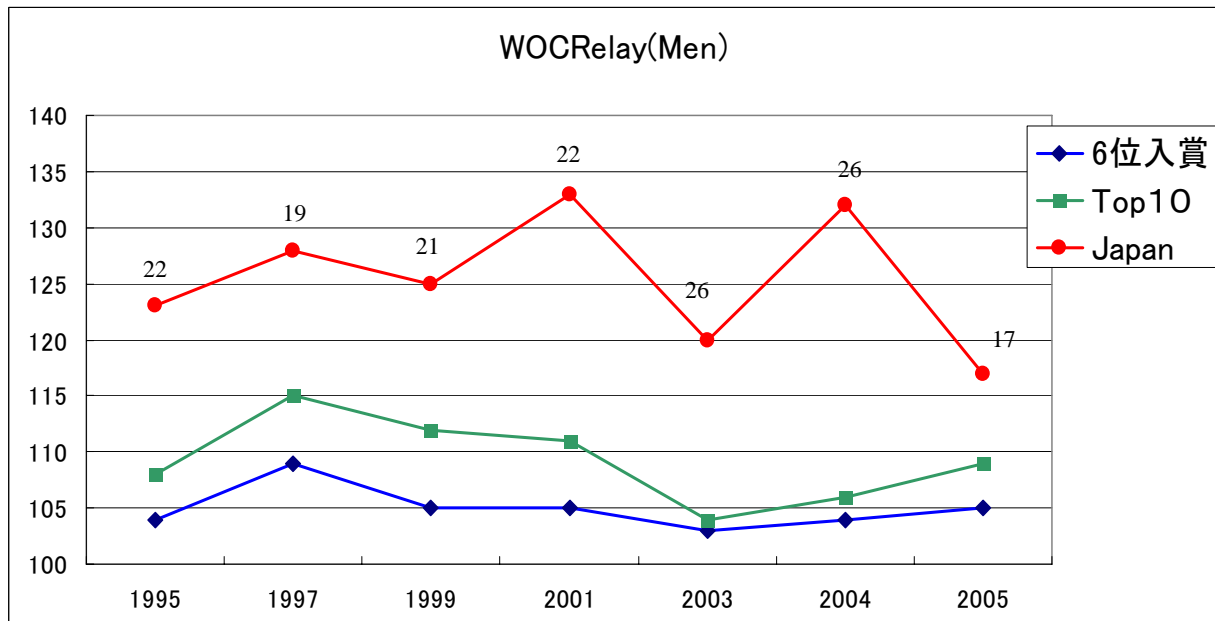


#### (4) リレー

##### ①男子

入賞ラインは極端に差がつかなかった 2003 年スイスを除きほぼ 105%。10 位以内のラインは 3 人制になった 2003 年以降からぐっと低くなった。

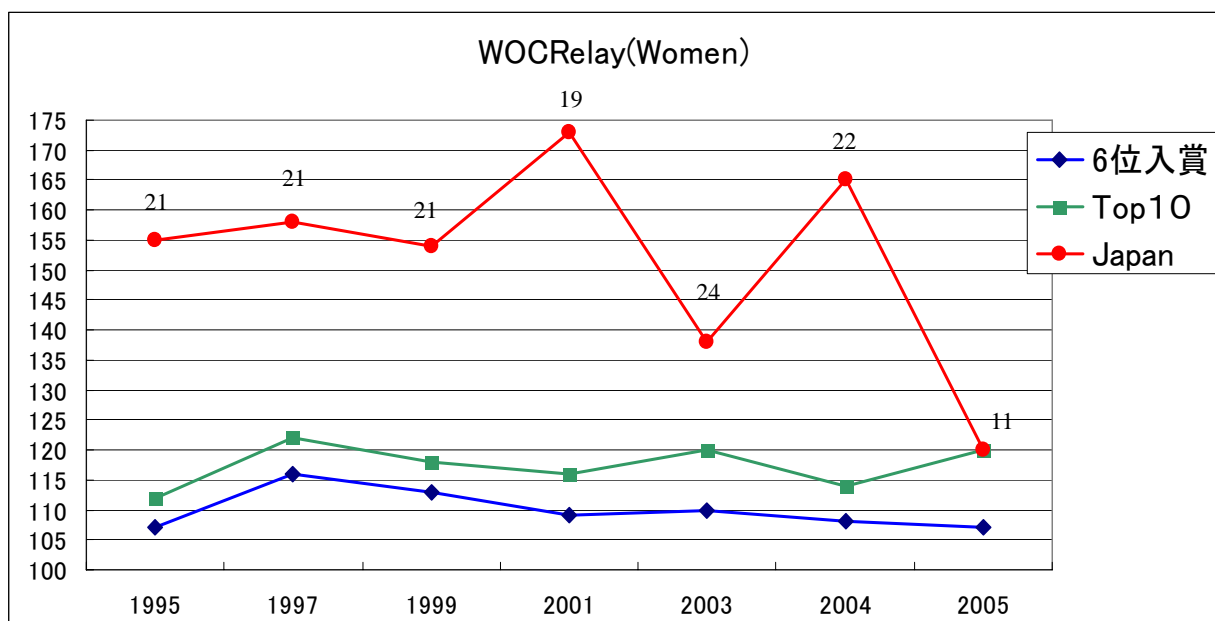
今年の 117%はおそらく過去最高。順位は 79 年の 14 位には及ばなかったが、3 人制になった 2003 年以降では 26 位→17 位と大きくあげている。ただし、参加国が少ないという要因はある。北欧 (97,01,04 年) と大陸系のテレインでパフォーマンスに差がある。



##### ②女子

入賞ラインは 105-110%、10 位以内が 115-120%。トップ数カ国と他の国の差が大きいため、男子よりは低くなっている。3 人制でも 4 人制でも特に変化は見られない。

トップ比、順位とも圧倒的に過去最高。10 位までは秒差。これまで常に 20%以上差があった男子とのトップ比との差もほとんどない。各種目を通じて最も優れた結果を残した。



## 2 WOC 2005 予選種目における巡航速度とミス率について

巡航速度とミス率の関係から、今回のWOCにおける各種目の傾向と予選通過に必要なレベルについて分析する。

対象は、ロング、ミドル、スプリントの個人3種目の予選。

グラフ中、予選通過者と不通過者の間に目安として青色の実線で相関直線を引いてある。このラインよりも右上では予選通過はできない。またその直線から左下にグレーで囲っているのは、予選のヒートによって通過、不通過が混在するエリアである。それよりも左下は、予選のヒートに関わらず確実に通過できるエリアである。

相関直線は、結果からもとにイメージで引いたものであり、計算上で算定したものではない。現実には直線にならない可能性がある。

### (1) 各種目ごとの総括

#### ① ロング

ロングは一番レース時間が長いため、相対的にミス率が低くなる。男子では多くの選手のミス率が10%以下と低く、通過、不通過を決める要因はまず巡航速度にかかっている。女子も同様の傾向であるが、男子に比べるとミス率が高くなっている。何人かの例外を除くと、男子で113%、女子で122%の巡航速度が必要である。

#### ② ミドル

相関直線が最も当てはまるのがミドルである。男女とも1人の例外を除くと、通過、不通過の間が明確に線引きされる。すなわち、ミスと巡航速度のトレードオフの関係が成り立っている。ミスを抑えて確実に走るか、それとも少々ミスしてもスピードを意識して走るか。3種目では最も技術的な要素が高いと思われる。

#### ③ スプリント

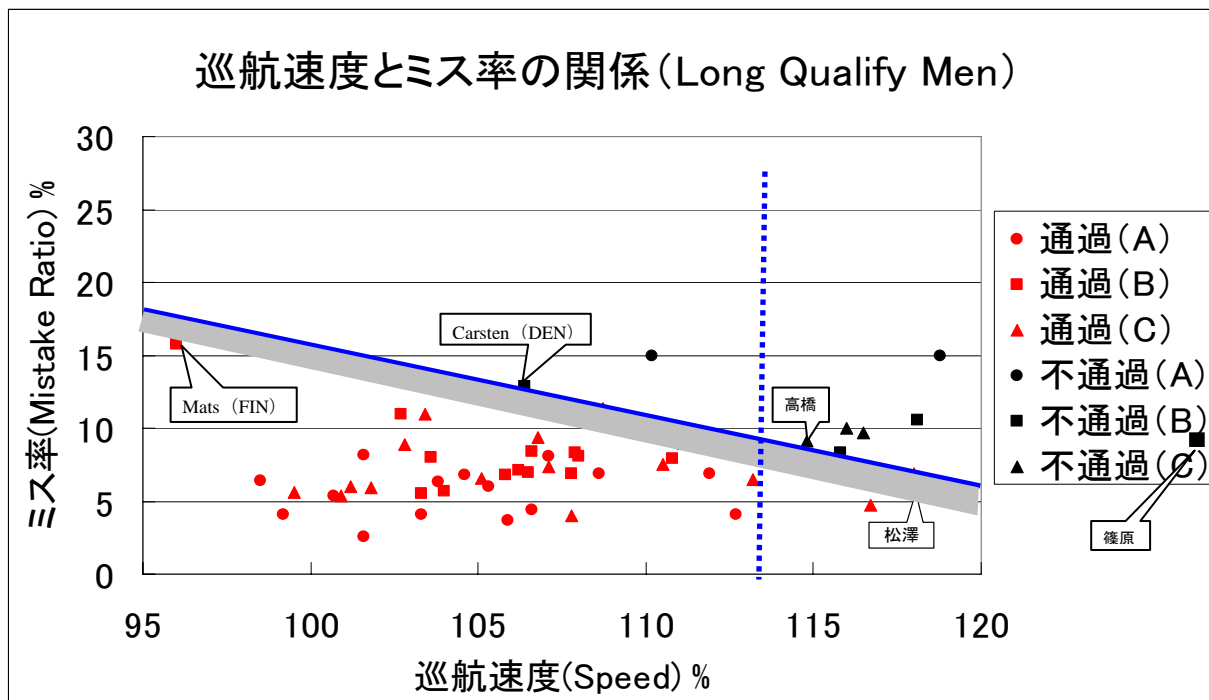
スプリントは、男女で傾向が分かれる。男子はミスが少ない選手が多く、予選通過に必要なのは、ある程度のミス率の低さ(12%)、それについて巡航速度(111%)である(当たり前といえば当たり前だが)。それに対して、女子に必要とされるのは一定以上の巡航速度(117%)である。これは男子ではトップとボーダーとの差がないため大きなミスが致命的な要因になるのに対して、女子はトップとボーダーのタイム差があるため、ミスしてもスピードがあればまだチャンスがあるともいえる。

各種目の分析については以下の通り。

## (2) ロング予選

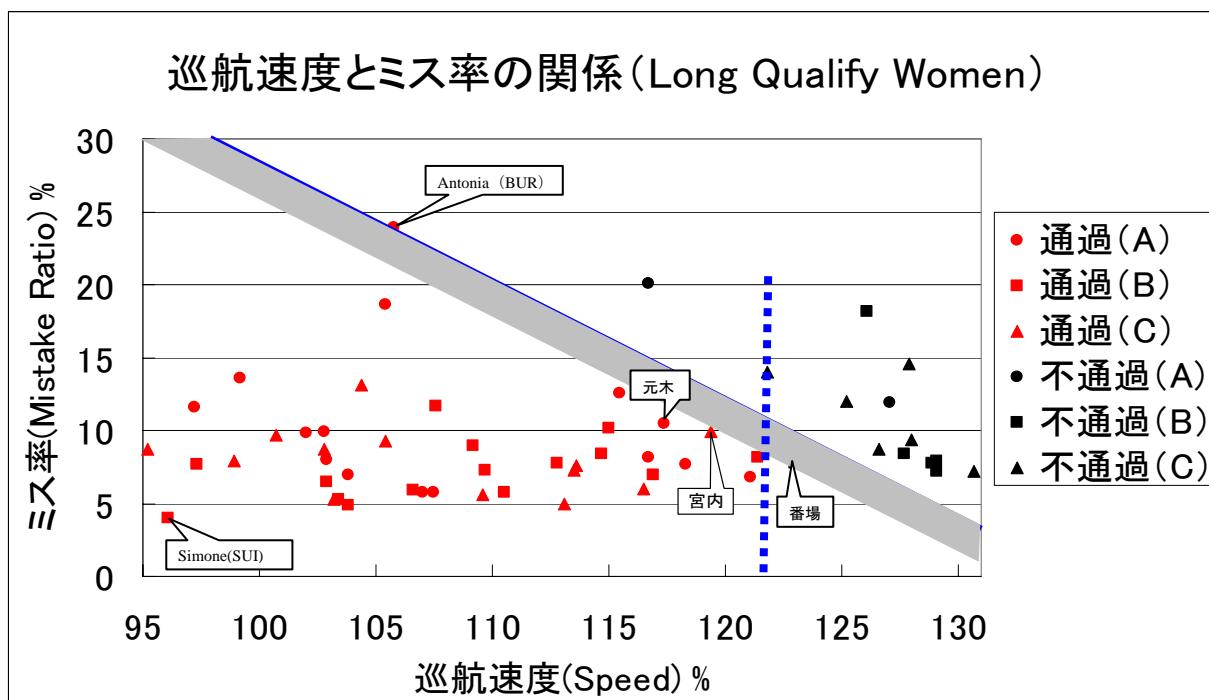
### ①男子

マツハルディンを除けば通過者のミス率は 11%以下。不通過者を含めてミス率 5-10%の間にほとんどが集中している。2,3 人の例外を除けば巡航速度 113%が必要になっている。日本選手では、松澤と高橋がボーダーのレベルであるが、巡航速度の点では厳しかった。



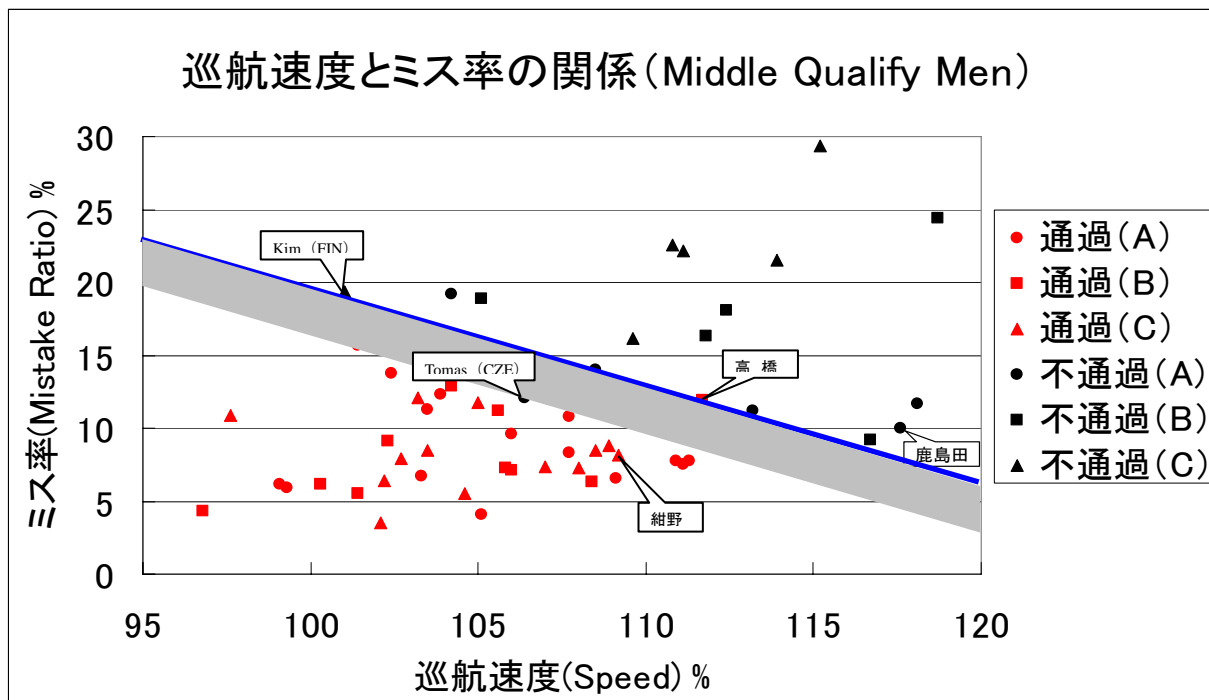
### ②女子

不通過者も含め、ミス率 5-12%の間に集中しており、2 人の例外を除き、巡航速度が通過不通過を分ける要因となっている。宮内、元木は巡航速度 120%で確実な通過圏内だったが、番場は 2 人よりミス率は低いものの巡航速度が 123%と低かったため、ボーダーで通過できなかった。



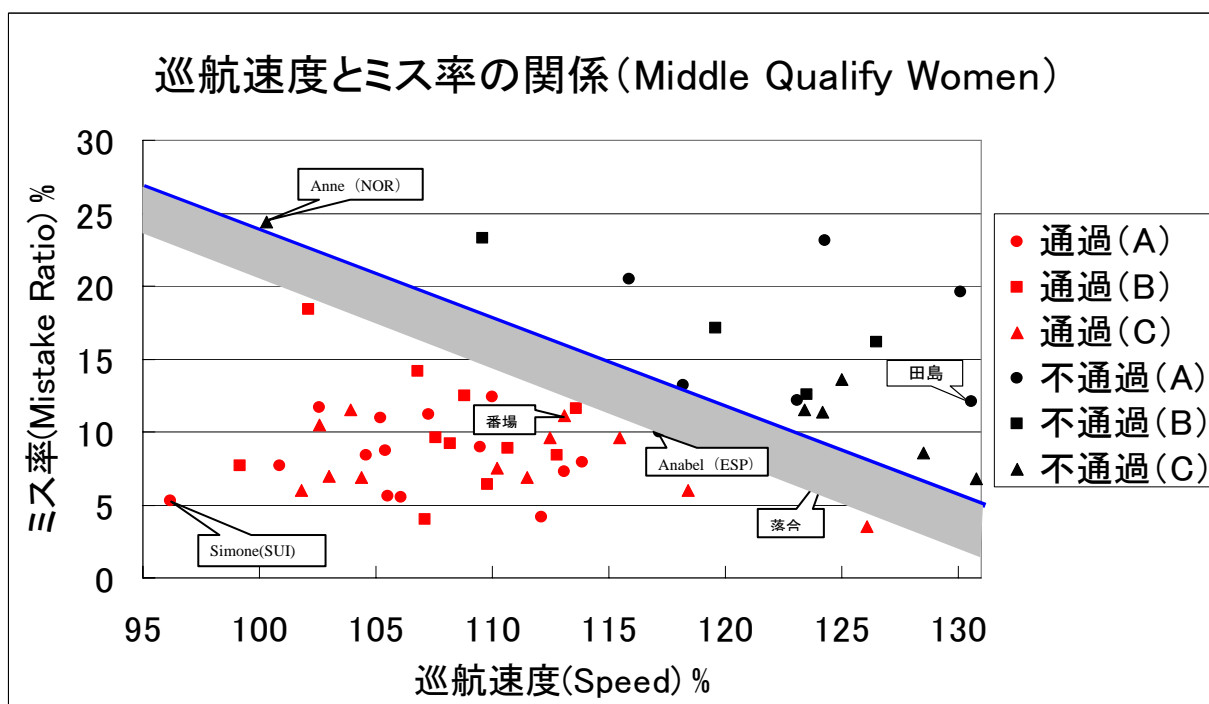
### (3) ミドル予選

Tomas (CZE) を除き、ほぼ直線状で通過ラインが引ける。Kim(FIN)は巡航速度 101%ながら、20%近いミス率が響いて通過を逃している。ロングよりも全体的なミスが増えているため、逆にスピードを抑えてもミスが少なければチャンスがある。高橋は全ヒートを通じて一番ギリギリの通過。紺野はミス率速度とも安全圏内で通過している。



### ②女子

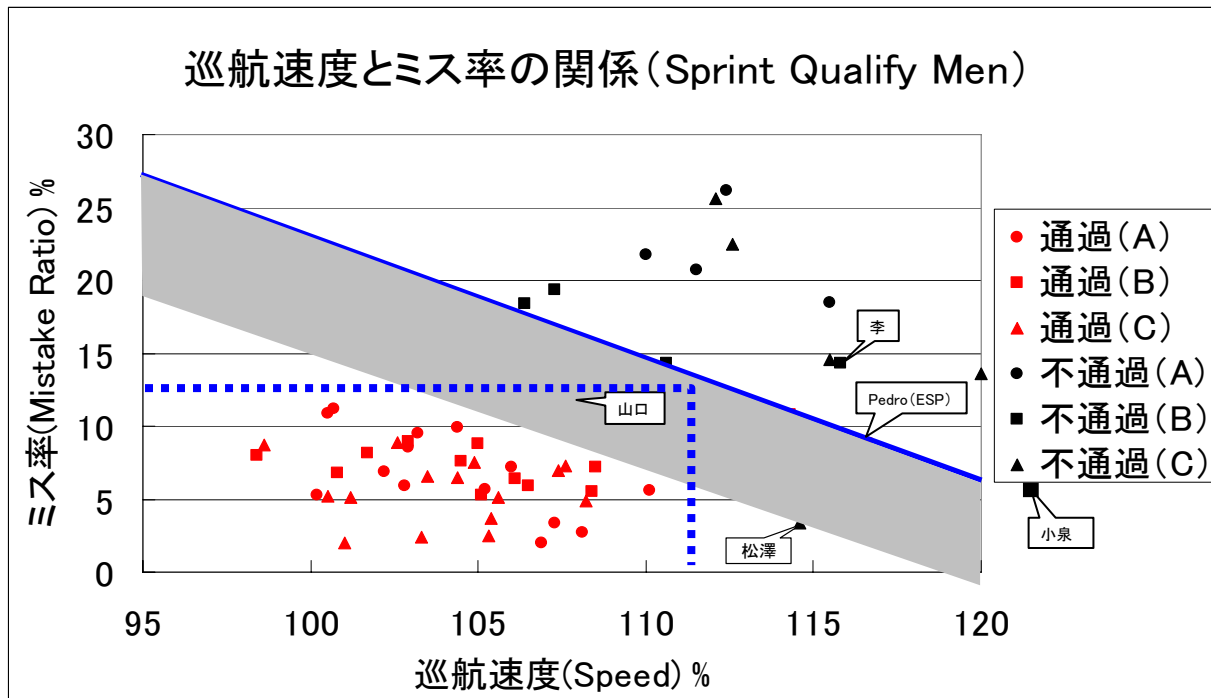
男子と動揺、一人を除いてほぼ直線状でラインが引ける。優勝候補でもあった Anne (NOR) が一箇所のミスで巡航速度 100%ながら通過を逃している。落合は巡航速度 125%ながら、7%台のミス率で通過。ミドルではこういうチャンスがある。番場は紺野と同様、安全圏内で通過している。シモーネのパフォーマンスが群を抜いている。



(4) スプリント予選

①男子

ミドルよりもむしろミス率が低い。スプリントのほうが波乱ありそうに思えるが、上位選手の多くがかえって確実なレースを心がけていると思われる。山口の 11.9%のミス率が通過者の中でもっとも大きい。松澤のミス率は 3.4%とすばらしいが、巡航速度が足りなかった。



②女子

ミドル以上に明確な通過ラインが引ける。予選とはいえ Simone (SUI) のパフォーマンスが群を抜いている。田島はミドルの落合と同様、ミスを抑えて 122%の巡航速度ながら 14 位で通過。宮内と皆川は十分余裕を持って通過している。

